

## 事例 B-2

### (1) タイトル：ソフトウェア開発におけるオープンソースの利用

### (2) 本文

A 社（仮名）は高度な画像解析ソフトウェアを軸にしたスタートアップ起業である。若い創業者らが中心となってソフトウェア開発を行っていたが、事業規模の拡大に伴いソフトウェア開発を行うエンジニアを中心に社員の採用を急速に進めているが、一方で退職する者もいる。

加藤さん（仮名）は、新卒で A 社に入社した若者であるが前任者が担当していた画像解析ソフトウェアに含まれる、ライブラリの開発を引き継ぐこととなった。加藤さんが引き継いだのは、コメントがところどころ入ったソースコードだけで、ドキュメントなどはなかった。加藤さんはソースコードがどんな経緯で書かれたのか知りたいと思いつつも、コードを書くのに夢中になり、二ヶ月ほどで加藤さんは、そのライブラリを完成させ、社内の会議でその報告を行った。創業者である社長から「加藤くんの作ったライブラリはオープンソースにして、広く使ってもらおうと同時にコミュニティともうまく連携して、さらによいものにしていこう。」とライブラリのオープンソース化による公開が行われることが告げられた。

加藤は、しばらくしてソースコード公開サイトで、A 社のクレジットの入った、そのライブラリのソースコードを公開した。

A 社の公開したライブラリは話題を呼び、ニュースサイトやソーシャルネットワークでも取り上げられた。そのライブラリを使った面白そうなサービス案も社外の人々により立ち上げられ、A 社はオープンソースの影響力の凄さを知ったのであった。その頃、加藤さんは若手ではあるが、ライブラリのコミュニティの中心となって、オープンソースコミュニティの醍醐味を味わっていた。

ライブラリのオープンソース公開から半年が経った頃、ソーシャルネットワーク上で「A 社が公開したライブラリのソースは B 社が数年前にオープンソースで公開したものに似ているのではないか？」という話が出始めた。程なくして加藤の元にもその情報が届き、加藤さんは自分自身でその真偽を確かめたいと思うようになった。加藤さんは前任者と連絡をとり、開発の経緯などについて深く聞いてみたところ、前任者からは「引き継ぎしたコードは B 社が公開したオープンソースをフォークしたものである。もともとのフォークしたファイルはサーバがクラッシュしたときになくなってしまったことと、大部分のソースを自分で書いたということもあり、B 社のクレジット部分は消してしまった。」という事実を知らされた。

### (3) 考えてみよう

- (1) A 社、加藤さんがオープンソースとして公開する際に注意しなければならなかった点は何か？

(2) 前任者は大部分のソースを自分で書いたということから、その元となった B 社のオープンソースのクレジット部分を消去してしまったが、本来であればどのように対応するべきであったか？